

西田哲学と近代日本のイデオロギー

田平 暢志

(鹿児島国際大学)

西田哲学とは何であったのか、この問題を解くためには西田哲学はどのような知をもたらしたのか、西田哲学を我がものとすることによって、どのような生の実現が可能になるのか、ということが明らかにされなければならないであろう。しかし、はたして西田哲学はこのような問いに明瞭で具体的な答をもっているのだろうか。

なるほど「全体的一と個物的多との絶対矛盾的自己同一」という基本的な哲学的立場と、そのような哲学的観点に立った世界の解明という点での西田の生涯を貫く哲学的格闘は、その徹底ぶりにおいて哲学者の範を示してもいるだろう。そして西田哲学の内部世界においては、そのような世界理解が「意味ある知」として流通しうるものでもあるのだろうか。しかしその哲学の外部世界に対しても、それは意味を持ちうるのだろうか。

ここでいう外部世界とは喜びや悲しみ、苦しみの中でより豊かな人間らしさを実現したいと日々願っている、現実の生活者が生きる世界という意味である。そのような生活者の、そのような願いと西田哲学が明らかにした「絶対矛盾的自己同一の世界」の間には通路があるのだろうか。通路が開かれるためには、まず現実の生活者の世界においても「意味ある知」としてその哲学が流通しうるものでなければならないはずであるが、そのような要求は現実性をもっているのだろうか。

西田幾多郎が『善の研究』を出版した明治44年という年は、その前年に起こったとされる「大逆事件」の判決によって24名に死刑の判決が下された年である。そして河上肇はこの年の中央公論誌上で「日本独特の国家主義」を論じて、「現代日本の最大の特徴は国家主義にあり」といい、その国家主義の特徴とはすべての個人を殺すことが国家の存立のため必要となれば、すべての個人を犠牲にしても国家を生かすというところにあるのだと喝破している。しかしものと心の独立的存在を否定して「主客同一」を説く西田は、「国家の本体はわれわれの精神の根底である協同的意識の発現である。……われわれが国家の為に尽くすのは偉大なる人格の発展完成のためである。」と述べて国家を個人の人格的「善」の最高表現形態ととらえているのである。西田哲学のことばと現実の関わりが厳しく問われなければならないと思う。